

優秀賞 福岡県 樋口 慶太 様 (高校生)

正直、年金というものに興味をもったことはなく、「聞いたことがあるな。」「自分には関係ないな。」位の印象でした。しかし、年金エッセイというものを書くにあたり、少しは情報収集をしなければならないと考え、一番身近な社会人である母にインタビューしてみました。

母自身、年金というものを真剣に考えたのは数年前だったそうです。それまでは、「たくさんかけてもどうせもらえない」「かけるだけ損だ」というネガティブな印象しかなかったと言っていました。それでは、母が真剣に考えるようになった数年前とは、一体何があったのだろう。そこで、もう少し掘り下げて聞いてみることにしました。ここからは母を主体として書き進めることにします。

(母談)

おじいちゃんは働き者で、家族のためにずっと働きずくめだった。ようやく仕事から引退し、おばあちゃんとドライブに行ったり好きなグランドゴルフを楽しんだりできるようになったのに、認知症が進んできたんだ。入院した先で転んで頭を打って2年間寝たきりだったのは慶太も覚えてるよね。そのうちおばあちゃんはパーキンソン病を発症してしまい、大変だった。おじいちゃんが亡くなったら悲しむ間もなくたくさんの手続きに追われたよ。その一つが年金だった。

いろいろ調べて初めて知ったことがたくさんあってね。おじいちゃんは年金を十分にいただいていた、生活には困らなかったのね。一方でおばあちゃんの年金はほんの少しだったの。おじいちゃんが亡くなっておばあちゃんの生活はどうなるんだろうってめちゃくちゃ心配したよ。本当に焦った。そしてあらためておじいちゃんに守られてたんだなあって感謝したよ。くよくよしてもしょうがないから、年金事務所に相談に行ったのね。すごい行列でずっと待って。職員の方は次から次に来る人々の対応をされていて本当に大変そうだった。

いよいよ自分の番になって、今の状況と心配なことをまとまりがないままに相談したら、職員さんが驚くほど親身になって調べたり計算したりしてくれたの。年金事務所って冷た

いイメージがあって近づき難かったけど、全くの誤解だったなあ。

結果、おじいちゃんの遺族年金がおばあちゃんに入ることがわかり、手続きを済ませられたんだよ。「お父様が頑張ってこられた分を、しっかりお母様が受け取られることになりますよ。よかったですね。」そう言ってくれた時、涙が出そうになった。お母さんも手続きの多さに疲れ果てていて、優しさに触れたことと安心感で、おいおい泣きたくなるくらいの出来事だった。

今、おばあちゃんは要介護4で施設に入所してるでしょう。スタッフさんがあたたかく、食事もおいしいっておばあちゃん喜んでるよ。お友達もできたしね。でも、施設に係る費用は全て、いただいている年金の中で賄ってるんだよ。これってすごいことだしありがたいこと。お母さん自身ずっと厚生年金を相当払い込んでいるけれど、おじいちゃんやおばあちゃんのように高齢者の生活を守っているんだなあと思うと、払ってきてよかったなと思うよ。

(母談終わり)

将来、僕が払い込む保険料がきっとだれかの生活を守ることになるんだと考えたら、もっと年金のことや保険料のことに興味をもって学んでいかなければならないと感じました。無関心な私の身近な家族が、実際に年金の恩恵を受けて健やかな生活を送れていることを知ってしまった以上、無関心からは卒業しなければならない。それが、よりよい暮らしを守る自分の一歩だと思います。